日時：2014 年 4 月 27 日（日）16 時～18 時
場所：関西沖縄文庫（大阪市営バス「小林」から東へ徒歩 3 分）
参加費：1,000 円
連絡先：関西沖縄文庫（金城 06-6552-6709）

講　演　者

前野賞（沖縄国際大学大学院地域文化研究科南島文化専攻（民俗文化）退学）

「わたしが沖縄というとき」

大城尚子（大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）

「普天間基地「移設」問題に係るプロパガンダを考える」

1952 年 4 月 28 日のサンフランシスコ講和条約締結から今年で 62 年目を迎える。その日、日本は独立を果たし、沖縄は米軍統治下に置かれた。この状況は、それまで東アジアで帝国として君臨していた日本の「帝国意識」をくすぐるものとなったのではないか？米国の「傘下」に同盟国（一見、立場上弱く見える）になることで、日本は経済発展を成し遂げ、アジア最大の経済大国となり、「戦後復興から飛躍的に発展した国、強い国」を創設することに繋がった。同時に、それは「植民地なき植民地主義」の実践でもあったのではないか。つまり、経済的には労働賃金の安いアジア諸国へ日本企業が進出し、軍事的には米国という大きな勢力をうまく利用することで戦前とは何ら変わりのない「帝国」を維持しているのである。それを裏付けるように、昨年の 4 月 28 日、国家的歴史偽造集会である「日本主権回復の日」を祝う式典が日本本土で開催され、他方、沖縄では「政府式典がっていんならん！「屈辱の日」沖縄大会」が沖縄で開催された。この温度差を今改めて考え直すことで、5 月 15 日の沖縄「日本復帰」を再考することに繋がるのではないか？